

別添 1：一般社団法人日本老年学的評価研究機構設立 1 周年記念シンポジウム  
発表及びパネルディスカッション概要

(1) 近藤克則 「これまでのデータを活用した産官学連携事例と今後の展望」

JAGES プロジェクトから JAGES 機構設立、その後一年間の活動実績として、WHO、中央省庁、自治体、企業、NHK をはじめとするメディアとも連携して健康長寿社会の実現に向けて活動してきたことが報告されました。また、これまで JAGES プロジェクトで自治体、研究者、企業の 3 者連携が機能した要因をまとめた WHO のレポートの内容を元に説明しました。「全ての関係者が Win-Win の関係を築き」、「学際的研究チームが連携してビッグデータの解析を行うことで新しい知を生み出し」、「地域ベースの参加型研究を実施し」、「現場のニーズに合わせたマネジメント支援ツールを開発し」、「様々なチャンネルを通じたアドボカシーを行い」、「戦略的に資金獲得を進めてきた」ことにあります。

(2) 中村明恵 様「内閣府における自治体保有データの活用と今後の方針」

内閣府からは、「骨太の方針 2018」で定められた「新経済・財政再生計画」の中でもデータ活用が求められており、重要な事項であることが述べられました。

「新経済・財政再生計画」では大きなポイントが 3 つある中で、その一つが行動変容を促す取組を促進することが含まれており、行動変容を生むためにもインセンティブの導入や、地域課題の見える化、公的サービスの産業化などが重要であると考えていることが述べられました。

また、行動変容を促し地域の方々自ら行動を起こしてもらうためには、自身の状況を理解してもらうことが必要であり、そのためにも地域の課題や特徴を「見える化」することが重要と考え、各地のデータの

「見える化」を進めているとのことでした。その際、データとしては横比較と時系列での比較ができるデータを蓄積していくことが重要であると考えているとのことでした。

(3) 悴田康征 様「SOIP をはじめとするスポーツ庁におけるデータ活用の

方向性について」

スポーツ庁からは、スポーツを産業として発展させるための方向性の一つとして他産業との融合を掲げており、スポーツをハブとして産官学が連携してイノベーションを起こすことを目指していることが述べられました。また、政府の「未来投資戦略 2017」においてもスポーツ分野における AI・IoT、ビッグデータ等の研究やバイタルデータの利活用について産官学連携を推進しイノベーションを起こすためのプラットフォーム「スポーツオープンイノベーションプラットフォーム (SOIP)」の構築が掲げられたことが説明されました。

こうしたデータをはじめとした産・学にあるノウハウを使ってスポーツ市場を大きくし、コンディショニングなどスポーツのノウハウを使って他の産業の発展や、社会課題の解決を目指すということでした。

そういった動きの中で、データ活用の促進やデータを使って新しい産業の創出などが期待され、学术界にはそうしたイノベーションを生むベースとなる知見の提供や科学的検証を期待しているとのことでした。

#### (4) 見村めぐみ 様「自治体保有データを活用した具体的事例」

横浜市様からは、JAGES の調査に参加して得られたデータを活用した市の取組について発表いただきました。

横浜市では、2025 年に向けて急速な高齢化が見込まれる中、横浜型地域包括ケアとして、高齢者だけでなく障害、子どもなど分野横断で地域の福祉のニーズに応える共生型の取組拠点「地域ケアプラザ」を中心に、活発な市民活動との協働、健康寿命の延伸に向けた「介護予防・健康づくり」、「社会参加」、「生活支援」の推進などを行っているとのことでした。

その中で、2013 年、2016 年と 2 度の JAGES 大規模調査に参加するとともに、2018 年には独自に JAGES と協力して調査を行っていることが報告されました。横浜市では、JAGES 調査の結果を地域包括支援センター職員への研修や住民説明、地域包括ケア計画の策定などに活かしていることや、地域包括ケア計画の策定だけでなく、地域活動のボランティア候補者を探すためのツールとしてや、計画の評価を行う際にも活用しているとのことでした。

また、こうした地域包括ケアの活動に民間企業と連携協定を締結して協力してもらうことで介護予防事業の促進も図っているとのことでした。

(5) 加藤清也 様「まちづくりにおける効果評価」

国際航業株式会社からは、仙台市の田子西 12 街区におけるデータに基づいた街づくりのテストベッドの計画や、その効果評価で JAGES と協力していることが報告されました。

今後進む人口減少と超高齢化社会を見据え、要介護になってからお金を使うのではなく、要介護にならないためにお金を使う仕組み作りが重要であると考え、田子西 12 街区のテストベッドに繋がったとのことでした。

このプロジェクトでは、JAGES 調査における「つながりが多いと要介護や認知症になりにくい」、「役割があると長生きしやすい」というデータを基に、コミュニティスクールや障害者グループホームなどを作り、そこで高齢者が役割を持って活動を行う事で健康にどのような効果があるかの実験を行うとのことでした。

この実験の重要な点は予防に資金が回ることであり、そのために SIB の活用を考えていること、SIB を機能させるためには評価が重要であり、その評価の部分で JAGES との協力を進めて行くことが報告されました。

(6) 浜田哲 様「データを活用した産官学連携の具体的事例」

日本電気株式会社 (NEC) からは、JAGES 調査に参加する千葉大学との協力の下、自治体保有データを AI に学習させることで介護予防に向けた効果予測シミュレーションを行い、それらを政策立案に活かすための取組を進めていることが報告されました。

このシステムが稼働し、自治体のデータを読み込ませることで、その自治体内や自治体間における健康の状態を見える化し(地域診断書等)、介護予防の効果予測を進めることで財政的効果も含めたシミュレーションが可能となり、そうした結果を政策立案や施策の実行に活かせるようになることが期待されているとのことでした。

また上記の他に、今後追加される大量且つ多種多様なデータの分析の

高速化や短いスパンでの仮説検証や分析モデル開発サイクルを可能とし、より相関が強い説明因子(仮説)の発見・絞り込みをより効果的にできるようになることを目指しており、そうすることで学术界の研究やその研究成果を用いた施策の向上に貢献することを目指しているということでした。

(7) パネルディスカッション「健康長寿社会実現に向けた産官学連携におけるデータ活用-その展望と課題-」

パネルディスカッションでは、「なぜ今データ活用や産官学連携が重要なのか」、「今後のデータを活用した産官学連携の展望と課題」の2点について議論されました。

「なぜ今データ活用や産官学連携が重要なのか」という点に関しては、共通して述べられたのが人口動態の変化など社会環境の大幅な変化や各分野の技術の高度化などから、産・官・学それぞれが単独で行うことの限界が見えており、そうした中で各自が強みを持ち寄ることで新しい課題解決に繋がるという認識がより強まってきたということでした。

「今後のデータを活用した産官学連携の展望と課題」では、これまで産官学連携を進める上で「何をすべきか」は議論されてきたが、「誰が」と「どうやって」の議論がなされず、結局産官学連携が進んでこなかった点が指摘されました。そうした中で、行政は前例がないと施策に反映させるのが難しいのが現状であり、リスクを取って前例を作っていくのが民間の役割ではないかという意見が出されました。そうした中で、学术界や企業が連携してエビデンスの創出を進めて行くことが重要であり、新しい取組として介護におけるソーシャル・インパクト・ボンド（SIB）やソフト面の充実などが取り組まれているが、そういった活動で評価をしっかりと行うことで、新しい取組を行政が取り入れやすくなるのではないかと意見が出されました。

一方で、民間や学术界だけで活動を行おうとすると規制などの問題が障壁となることがあり、そうした時には行政の協力が不可欠であるとの意見が出されました。産業界と学术界が協力して行政の使えるエビデンスを創出できるよう、様々な活動に行政がサポートを行っていく、そのような形が理想的ではないかという議論でした。実際に、これまで介護

施策の効果について説明が難しかったが、JAGESの調査を活用することで財務部門への説明ができるようになったとの声も出されていました。

また、データの活用に関しては現在の流れからして、本人の同意を丁寧にとっていくことが重要であるとの意見が出される一方で、同意を取ることに時間と労力がかかり競争力を奪うことに繋がることは避ける工夫が必要であるとの意見も出されました。そのためには、情報を提供する住民の方への動機付けが重要であり、住民の方の動機付けとなるような結果の創出や「ここならデータを任せても大丈夫」と思ってもらえるようなブランドの創出も重要であるという意見が出されました。

最後に、日本は高齢者問題に関しては課題先進国であり、データを活用して皆で課題解決に向けていこうという機運づくりが重要であり、また世界の中では日本が最も予防対策が進んでいるという評価がある一方で、日本自身はその理由を答えられない現状があり、データを活用してその答えを探って発信していくことの重要性も述べられました。

以上